幼稚園でしてゐること

——遊びの間にする指導——

倉橋惣三

「お子さんの幼稚園を御覽でしたか」
「ハイ、拜見いたしました」
「拜見なんかなさらなくても…。どころで、どうです」
「みなさんよく遊んでゐますのですね」
「よく遊んでゐるでせう」
「ほんとによく遊んでゐます」
「實によく遊んでゐますね」
「まことによく遊んでゐます」
「ハ、、、、」
「ホ、、、、」
「そこで」
「まるで遊んでばかりゐるやうで御ざいますのね」
「いけませんか」
「いゝえ、結構で御ざいますが、でも何かもう少しは…」
「といひますと」
「もちつと何かお稽古を…。遊ぶだけならば、どこでも出來ることですし」
「さうでせうか。お稽古とおつしやる方は後のお話にして、その、遊ぶだけならばといふのが、實は中々容易ならぬことなのぢやありますまいか。どこでも出來ませうかしら」
「ナル程」
「そんなに早く、ナル程をおつしやつては、お話が濟んでしまひますが、その遊ぶだけといふことが、家庭だつて外だつて仲々出來ませんよ。第一場所もなし」
「宅では庭が廣う御ざいまして」
「さうですか。それはいゝですね。どん

五月の御馳走

榮養研究所　佐々木理喜子

日常の御飯に外米が入つてゐますのでお子樣には、まぜ飯にして慣らせ、又出來るだけ軟く炊きましたり、少々糯米を加へるとか夫々御工夫下さい。

① 鰹飯

材料　鰹三〇瓦　牛蒡二〇瓦　人參一五瓦　油二瓦　青豌豆少々　以上で蛋白質八・五瓦、溫量は一〇〇カロリー

調理法　鰹は切身を薄く程よく切ります。牛蒡は細く短く纖切り、人參も同樣にして一緒にして油で炒めお湯を加へて軟く煮て、砂糖、醬油で薄味に味付けます。此の煮汁を加へて御飯を炊き、沸き立つた時に御飯の上に鰹をのせ、そのまま蒸します。うつす時に牛蒡、人參を加へてよくまぜ合せます。青豌豆をふりかけます。

② 生節の煮付けと野菜のピーナツ和へ

なにお廣いのですか」
「大した事でも御ざいませんが、築山もあり泉水もあり、先代が風流の人ですきを凝らしてゐますので」
「それはお立派でせうね。でも、そんな名園では、お子さんが荒してはいけませんでせう」
「岩一つ、老木一つ、夫々いわれがありましてね。札が立てゝ御ざいましてね」
「手を觸るべからずですか」
「相當古いものださうで」
「まさか、登るべからず警視廳ではありますまいね」
「そんなやかましいことはありませんが、折角の先代の丹精の跡はね」
「それですよ。それぢや、子どもは存分遊べませんね」
「でも座敷より自由で」
「お座敷だつて廣いでせうに」
「何しろ家中きれいずきでしてね。散らかされるのが禁物だもんですから。子どもゝそれを心得てゐるので御ざいませうよ」
「へエー。實際、餘りキチン〳〵片づけられては、のび〳〵遊べませんからね」
「それに客も多う御ざいまして」
「益〻、たまりませんね」
「でも、客の時は、子どもゝお相手してゐて喜んでゐます。それに宅の子は、年寄りつ子のせいか、おとなに相手してもらふことが好きでして」
「おとなつていふ譯ですか」
「お客樣とお話なんかしてゐますのを聞いてゐますとまるで年寄りのやうで」
「こりややりきれない。：いえなにね」
「それで自分も面白がつてゐるので御ざいますのです」
「幼稚園で、その上おとなにして呉れとおつしやるのでせうか」
「といふ譯でもありませんが、折角御教育に預りますのですから」
「ですから、こゝでは存分遊ばせて上げてゐるのですよ」
「あれで、利口になりますのでせうか」
「さあ、なるといへばなりますね。なりますよ。たゞ無理に仕込まないだけです」

材料　生節二五瓦　生姜汁少々　油三瓦　筍二〇瓦　莢豌豆一〇　人參二〇瓦　落花生五瓦以上で蛋白質八・七瓦　溫量は一〇四カロリー。

調理法　生節は程よくほぐし砂糖、醬油を用ひて普通に味付けます。生姜汁を少々加へます。筍は小く切り、人參も同樣にして薄味をつけます。落花生をすりつぶしたものを此の煮汁でのばして材料を和へます。莢豌豆は青茹にして斜に三つ位に切り、一緒にまぜます。

③　みつ豆の代りに（間食）

材料　白玉粉三〇瓦　りんご四〇瓦　みかん少々　砂糖八瓦以上で一五〇カロリー。

調理法　世間で一般にみつ豆が流行致しますが、寒天や豌豆は小さい方には不消化で如何かと思ひます。白玉粉をこねて小さいお團子を作ります。林檎は薄く小さく刻みます。みかんは袋からみをとり出します。ガラスの器に白玉粉を盛り、上に林檎みかんをのせて砂糖密をかけます。食紅を用ひて紅白に作ると喜ばれます。果物は時節の物を何でも利用して下さい。

「遊んでゐるばかりで……」

「ばかり〳〵とおつしやいますが、遊んでばかりゐる氣なのは子供の方で、そこには先生がついてますからね。先生は遊んで許しゐるのではありませんからね」

「やつぱり時々は教育していたゞくのでございますか」

「時々ぢやあない。始終です。餘り始終だから外から氣がつかれないのでせう」

「へえ、始終……」

「さうです。先生はたえ間なく、つまりは機會ある毎にですね」

「と申されますと」

「一體あの遊びといふものが、そのまゝで大きな教育的ねうちをもつてゐるものですが、それを傍から一寸手傳つたり、誘ひかけたりすると、こちらの望む方向へ、その教育的效果を發揮させてゆくことが出來るのです。あんまり力を借し過ぎると却つていけませんがね。その機會の見つけ方と、導き具合とに幼兒教育のコツがあるので、その名人が幼稚園の先生なんです」

「ナル程。つまり、子どもは教育されてゐるとも知らぬ間に、巧みに導いてゆくのでございますね」

「こんどはナル程とおつしやつて下さつてもいゝでせう。巧みにといふよりも、自然にといつて下さい」

「それが私どもには、なか〳〵出來ませんことで」

「われ〳〵だつて、相當難かしいのですが、幼稚園ではいゝことに友達がゐますのでね。その間に、いゝ機會もいゝ導き方も、家庭よりは容易になるといふ譯です」

「子ども許りでなく、私たちも、さういふ風に指導教育していたゞくと幸で御ざいますね」

「幼稚園へおはいりなさいましよ。その代りメンタルテストの結果、幼兒のやうに元氣な方でなくてはお入れ出來ませんよ。なまけ遊び、骨休め遊び、慰安遊びなんかは、とても指導の價値がありませんからね。ハ、、、」

「やつぱり子どもでなくてはいけませんのね。ホ、、、、」

文部省推薦圖書のうちから

○「ドウブツエホン」上　武井武雄編
鈴木仁成堂發行　金四十錢

○「ドウブツエホン」下　武井武雄編
鈴木仁成堂發行　金四十錢

これは、幼兒と共に見る繪本としていいものです。たゞの動物知識でなく子どもの心もちを養ふものです。

○カタカナ童話集　德永壽美子著
金の星社　金一圓

これは小學校一二年生の兒童が自分で讀むやうに書かれてゐるのですが、幼兒にも讀んで聞かせてやるにいゝでせう。作者が母親としての立場に立つて子どもへの愛情を見事に具體化してゐるところが、この本のねうちとされてゐます。